

## 馬千里日記考 (2)

浜口允子<sup>1)</sup>

### On the Diary of Ma Qianli

Nobuko HAMAGUCHI

#### ABSTRACT

The years between 1920 and 1924 are often regarded as the “transitional period of the National Revolution.” If we accept this evaluation as an accurate representation of the period, then we might point to the fact that in spite of the continuation of warlord control in the political system, there were numerous movements in society at large that were bringing about a change in popular consciousness. In the period after the May Fourth Movement, the newly flourishing mass media was one of the important influences on such revolutions in consciousness. The *Xin Min Yi Bao*, founded by Ma Qianli and a group of his colleagues in 1920, is one example of this new mass media. In this essay I am going to use the references to this newspaper that can be found in Ma Qianli’s diary for the period between the founding of the newspaper and the date when it ceased publication. This essay will focus on the *Xin Min Yi Bao*, examining the management of the newspaper, the newspaper’s editorials, the special supplements it published, and the influence of the newspaper on society at that time. The essay will also give some attention to the young intellectuals who were associated with Ma Qianli and the various careers they followed in later years.

#### 要旨

1920年から24年にいたる時期は、中国社会にとって「国民革命への過渡期」と考えられている。そうであるならば、政治の場ではなおも軍閥支配が続くこの間も、社会の底流では人々の意識の変革に向けて様々な運動が続けられていたということができよう。とりわけ五四運動以後に際立ってきた近代的マスメディアの盛行が、そうした意識変革に与えた影響は無視し難いものであった。1920年に馬千里が中心となってすすめた『新民意報』の発刊は、まさにそうした運動のひとつであったとすることができる。本稿は、その発刊から停刊に至る間の同報について「馬千里日記」をもとに明らかにしたものである。ここでは専らこの新聞を対象として、その経営について、論説について、副刊について、更にはこの新聞が当時の社会にどのような影響を与えたかについて論述した。また馬千里周辺の若い知識人たちが、それぞれに、その後どのような方向に進んだかについても言及した。

馬千里 (1885～1930)

教育者、社会活動家。名は仁声、天津の人。北洋大学露文専科卒業 (1906)。次いで上海振華学校 (1907)、天津南開中学 (1908) の英文、数理を卒業。張伯苓の推薦により南開中学教員 (1912)、直隸女子師範監学 (1915)。1917年天津教育考察団に参加して日本を視察訪問。1919年五四運動に際して天津各界聯合会副会長、日貨排斥委員会主席。1920年1月運動のなかで逮捕、7月釈放。9月『新民意報』を創刊。1921年達仁女校校長。1923年葉王廟小学校長、天津教育局第一区教育委員。1924年直隸省教育会委員。1925年天津県議会議員、参事会参事。1927年中国国民党に加入、28年党務指導委員会委員。南開校友總會天津分会主席、天津赤十字会幹事長、副会長。1930年3月1日病没、享年45歳。

<sup>1)</sup> 放送大学教授 (「人間の探究」専攻)

## はじめに

前稿にあたる「馬千里日記考(1)」<sup>1)</sup>は、馬千里が23年間にわたって書き続けた日記の概要を示し、その資料的価値に言及しつつ、馬千里が大きくその行動を変えていく五四時期の状況と、その後半にみられた国民大会結成にいたる経緯およびこの運動の特質を明らかにしたものであった。また運動の展開の中で馬千里が半年余の間、周恩来らと共に逮捕され拘束されていた際の時代状況についても述べた。本稿は、その後をついで1920年8月以降の「馬千里日記」を20年代前半を中心にみていくものである。その問題意識は、この年から国共合作の始まる24年に向けての時期が中国社会にとっては国民革命への「過渡期」としての傾向をもつ時と捉えられ、であれば、まさにこの時期が基層から、より詳細に明らかにされる必要があると考えるからである<sup>2)</sup>。この時期に先立っては五四運動という民衆運動の高まりがあり、民族産業の勃興ともあいまって多様な社団や組織が力をつけてきたが、しかし政治社会の表層では、なお各派軍閥による度重なる戦いと強圧政治がつづいていた。これはつまり、この時期を「過渡期」としてその後の歴史を展望するならば、軍閥支配の間も社会の底流では様々な個人や各種団体・組織によって絶えることのない運動がつづいていたということであろう。

ではこの間に、本稿が対象とする天津社会にあっては、人々の間でどのような意識の変化が見られたのであろうか。又それは何によってもたらされたものであろうか。そして本稿が取り上げる馬千里の傍らに立ってみれば、釈放されて再び始めようとした運動とは、まさしくこの社会各層への働きかけであり、したがってこの時は、馬千里らが自らの側の力を強化したいという願望のもとで、一方では直接的な運動を行ない、他方では人々の意識を如何に変えていくかに腐心したときであったと考えられよう。その後者の代表的な事例が「報館」(新聞社)の設立であり、新しい「報紙」(新聞)の発刊であった。そして、大きく時代を捉えるならば、このような各地各層で積み上げられていた運動が、その後国民革命を生み出し、時代を動かしていったものだといえるであろう。

この点から本稿は、特に馬千里が先ず着手した新聞『新民意報』の刊行についてとりあげる。そしてここでは、馬千里の行動を追うとともに、かつて五四時期に馬千里と共に逮捕され、共に釈放された若い知識人群像が何をしたのかにも関心をはらいたいと思う。

## I. 『新民意報』の創刊と馬千里

### 1. 創刊に向けて

1920年7月17日、1月以来の拘束を解かれ釈放された馬千里は、ひとしきり続いた歓迎行事が終わると南開大学の職を辞し、休むことなく新しい活動を始めた。

特に続く8月は、馬千里にとって活動を全開したともいえる忙しいときであった。「日記」からは、何れの日も一日をフルに使って、エネルギーに多様な活動を行なっている様子を見ることが出来る。毎日、訪ね、訪ねられることで様々な人々と出会い、語り合い、共に食事し、各種働きかけを行なっている。試みに「日記」に記されている人物名を数えてみると、8月の31日間で、それは延べにして174名にも及ぶ。しかもこの数は、親族をのぞき、また紅十字会、天津各界联合会、国民実業儲金公司董事会、青年会など会議や集会で出会った人を含めない、あくまで個別に関わった人たちのそれであるところから、この夏に馬千里が如何に精力的に動いたかを推察することができよう。そしてその中で、この時の「日記」に最もよく登場する人物が、時子周、孟震侯、劉鉄菴であった。8月の1か月の間に、時子周とは18回、孟震侯とは15回、劉鉄菴とは6回出会って行動を共にしているのである。しかもその主たる目的が「報館」の設立による新聞の発刊にあったことは、8月2日の以下の「日記」から明らかである<sup>3)</sup>。

午後またまた会賓楼へ行った。孟震侯が李壯飛を招き、席上劉鉄菴が新聞の発刊をやりたいのだと言い、李に靳翼卿に話してほしいと頼んだ。いま1万元があれば(新聞の)「普通版」発行社と「小型版」発行社を共につくることのできるのだと述べたのである。

先ずここで、以上の登場人物について、大よその説明をしておく必要があるだろう。

時子周と孟震侯は、前稿において既に述べたように、1920年1月に馬千里と共に逮捕され、警察庁及び検察庁に半年の間拘留されていた「同志」である。なかでもこの3人に夏琴西(後出)を加えた4人が当時警察当局によって「四凶」と目されていたと伝えられる<sup>4)</sup>。

このなかで、時子周はこのとき42歳、保定大学卒業後天津の南開学校で教師となり、五四運動期には回民代表として天津各界聯合会の評議員をつとめた。馬千里とは極めて親しく、常に往来し協働して動いた人物である。孟震侯は35歳、『京津タイムス』漢文版の責任者であり、出版関係に詳しくあったと思われる。劉鉄菴は、女性運動で名高い劉清揚の兄で天津各界聯合会の代表の一人、1919年暮れからの国民大会運動にも参加していたのだが、逮捕されなかったため、馬千里らが拘禁されていたときには時に面会に来て差し入れを行っていた。彼もかつて『午報』の編集や経営に当たっており、報道メディアについては関心が高く、むしろ積極的に今回の企画を推進していたと思われる。なお夏琴西はこの後も大いに協力する天津出身の弁護士で、天津総商会秘書長もつとめ学生運動に理解があったとされる。そしてもう一人、上記「日記」の中で支援を依頼したいと名前が上げられている靳翼卿とは、北洋軍閥官僚で、はじめ段祺瑞の門下で参謀長を



の新聞創刊という大きな出来事のなかにあっても、馬千里、時子周、孟震侯、劉鉄菴らは、14日も、16日も天津各界聯合会に出席し、特に馬千里はその議長をとめている<sup>10</sup>。同会議がこの日取り組んでいたものは、この年天津周辺を襲った蝗害と旱害そして兵災によって一帯の人々の生活が破壊され、いまや目に余る惨状が生じていることへの対応策であった。会議の席上なされた宋則久の報告によれば、天津駅付近は難民であふれ、飢えと寒さから病気の発生が懸念されているため目下の急務は以下の3点である、ということであった<sup>11</sup>。①直ちに応急住宅や公的祠堂を提供して、難民に住むところを与えること。②速やかに粥廠を開き、飢餓に対処すること。③直ちに医者をもよおし、随時災民を診察すること。また、そうした活動のためには、本会のみでは不十分であるゆえ、直隸義賑会、災民救済会、青年会、紅十字会、善堂連合会、基督教連合会などにも呼びかけ対応を依頼するとし、その最後に国民大会の準備についても話し合ったというのである。したがって、『大公報』の翌日の記事「紅会開董事会議」によれば、紅十字会天津分会の責任者である馬千里は、この呼びかけを受けて15日開催のその会議に、『新民意報』創刊当日ではあったが出席しているのである<sup>12</sup>。こうした点から、馬千里にとっては、人々の救済と新聞の発刊とが、同じ問題意識の同列のものとして認識されていたことが察せられる。つまり、この時の難民は主として自然災害によって引き起こされてはいるが、しかし人々の生活の困窮は相次ぐ軍閥戦争や軍閥体制による影響もまた大きいのであって、そこから裁兵と平和と新たな体制を求める人々の願いが、まさしく時代の要請であると認識され、馬千里はそれを代弁しようとしていたのだと理解される。直接の運動によってであれ、新聞という言論活動によってであれ、彼の活動はそうした願望を実現することに主眼点があったのだということができよう。

### 3. 刊行継続への努力

新聞の刊行は始めてみると、やはり困難を伴うものであった。最初の資金は結局5人の発起人が各自100元ずつ出資した計500元であり、他は賛助者の協力金や広告収入でまかなおうと予定したのだが、もともとこの紙の読者は教育界の教師や学生そして進歩的知識人に限られていたため、発行部数は低迷し、従って広告収入も思うようには伸びなかった。そのため翌年2月になると資金繰りにも行き詰まり経営が赤字となって、紙面の改革と刊行の方法を見直すことが求められたのである。

1921年2月3日、これまで4か月余の間、新聞の刊行をつづけてきた新民意報社は「株主」会を開き、馬千里以下5名がすべて集まって対策を協議した<sup>13</sup>。その結果以下の諸点が決定されたのである。①これまで大判見開き1枚で4面であったものを、2枚の8面とし内容の充実をはかる。②紙面の増加にともない、各自による紙面の分担を明確にする。③記事については、

広州、上海その他諸都市の通信員からも情報を得て掲載する。北京の記者からは、毎日その日最後の重要ニュースをえて報道する。④印刷所経費の削減をはかる——。そして第一に着手されたものが印刷経費削減のため自前の印刷所を設けることであった。2月22日、馬千里らは華北印刷局から印刷機械及び鉛字のセットを1650円で購入し、新印刷所を設けることとした。このときその資金は馬千里以下5人が再び各100元を出し、他は善意の寄付や宋則久を介して国貨售品所から借りた借入金でまかなった<sup>14</sup>。こうして新印刷所は5月14日から起動し、新聞以外に外部の印刷も引き受ける態勢が整った。この頃の「日記」には、「今日の新聞は760部発行した」<sup>15</sup>「交通部と接触し、津浦、京漢、京綏、京奉の4鉄道線から広告費が毎月各25元、計100元入ることとなった」<sup>16</sup>などという明るい記述も見える。但し赤字はなおも続いていた。

1921年9月15日、新民意報社は設立1周年を迎えた。この日の活動は同社にとって一つの画期となるものであり、そこには彼ら当時の知識人たちの特徴を示す動きもあるところから、以下に若干触れておくこととする。但しこの記念日の馬千里の「日記」は極めて簡単なものであった<sup>17</sup>。多忙と疲れとで、長く筆を持つことができなかったのかもしれない。

『新民意報』は満1年を迎えた。遊芸会を開き、平安映画館を借り切って新劇「巡按」を演じた。1000人以上の客が詰めかけ、夜12時にやっと解散した。

この日、『新民意報』創刊一周年記念の集いは、夜7時馬千里の挨拶で始まり、ついで音楽と漫才が披露され、そのあと新劇「巡按」が演じられた。「巡按」とは、ロシアの作家ゴーゴリによる「検察官」の翻訳劇である。この“役人と不正”について諷刺した劇は、中国においては「欽差大臣」あるいは「巡按」と訳され、1920年代、30年代に多くの劇団によって上演され反響をよんだ演目である。このときは、時子周が演出を担当し自ら県長を演じた。孟震侯は教育局長を、劉鉄菴は警察局長を、劉嘉猷は県長夫人を演じ、その他の配役には南開学校や国貨售品所や他の中学校などから人材を得た。だが、この日の上演が契機となり、彼らの中に演劇活動への関心が高まったことについては注目しておく必要があるだろう。彼らは、こののち新民意報社の応援をえて、劇団「同志新劇社」を結成したのである。時子周が社長、劉鉄菴が副社長、そして団員が20名余という小さな劇団であった。だがこの劇団は、この後多くの慶祝活動や公共の集会に賛助出演し、その演目も「一念差」「闊人的孝道」から「車夫的婚姻」「黄金骨肉」「庸人自擾」などとそのレパートリーを増していった<sup>18</sup>。時には地方にも招かれて上演し、南京では空前の盛況であったという。こうした近代的演劇活動への傾倒は、天津では1910年代以来顕著に見られた知識人による実践の一つである。上記との

関係で具体例を挙げれば、1910年代には南開学校長で著名な教育者である張伯苓の影響もあって南開は演劇活動の拠点のひとつであった。そして伝統劇や翻訳劇ばかりでなく、自分たちの創作劇が欲しいとした張伯苓は、1916年に教師7人、学生4人を連れて合宿をおこない、一つの劇をつくりあげたが、その際の団長が時子周であり学生の一人が周恩来であった。そしてこの時生まれた劇が時子周作の「葉中誠」であり、この劇がその後幾たびか改訂されて名称を変えたものが先の主要演目である「一念差」であった<sup>19</sup>。演劇活動が当時このように盛んに行なわれた理由は、社会変革にとっては、演劇による啓蒙が特に有効であると考えられていたからである。新文化運動の中で演劇改革に少なからぬ貢献をしたとされる蒲殿俊は、新劇について概ね次のように述べている<sup>20</sup>。「演劇は人々を光明に導く星である。古い偶像をうちこわす利器である。新しい中華を開拓する鋤である。多大なる精力をもって取り組むに値するものである」と――。先にも述べたが、馬千里、時子周らが求めたところは、人々に働きかけ、そこに新しい「国民」をつくりだすこと、その「国民」が自覚して自らの「国家」をつくりだすことであった。従って、新聞の発刊も、演劇活動も、各種運動への参加も、彼らにとっては同じ問題意識の上にあるものであったということが確認される。また、この観点からみると、同時期の他の諸団体の活動の中にも多くの演劇活動が埋め込まれていることに気づかされる。これも演劇が、特に基層における自覚の広がりにも効果があると評価されていたことを物語るものであろう。

## Ⅱ. 刊行された『新民意報』と馬千里

### 1. 論説

極めて残念なことだが現在までのところ、実際の『新民意報』は見ることができない。一部紙面の写真と、一時期の副刊の合訂本を見ることができのみである。そのため、紙面構成についても、「日記」の記述によって凡そはわかるものの詳細までは不明であるというほかはない。まして論説等の内容については、「日記」にあげられている論題と他からの言及で推察できるところもあるが、あくまでその域を出るものではない。従って、ここでは主要な論題について、それが馬千里の前にどのようなものとして見えていたのかを時代背景を加えつつ説明するにとどめなければならない<sup>21</sup>。

先ず第一の主要な論題は「日本」であった。日本という存在は、『新民意報』創刊の時点でも、馬千里にとって最重要関心事の一つであった。なぜなら、前稿でも明らかにしたように、そもそも1920年1月の彼の逮捕や半年におよぶ拘束それ自体が日貨排斥に起因するものであったからである。また7月に釈放されたものの、この根幹を成す不平等条約問題も、山東問題もなお未解決のままであったからである。従って馬千里が、創刊された『新民意報』に最初に書いた論説が

「拙策的日本当局」であったとしてもなんら不思議なことではない<sup>22</sup>。その故に、以来、日中間に何らかの問題がおこったり、馬千里周辺に何らかの関連する事態が生じたりすると、彼は敏感に反応して紙上に意見を寄せているのである。「中日不能親善」<sup>23</sup>「一個日本人的誤会」<sup>24</sup>「輿論的勢力」<sup>25</sup>「法律与道德」<sup>26</sup>「三句話離不開本行」<sup>27</sup>などがその例であらう。それらは時代状況をふまえ、日本に対し或いは日本に加担するものに対して、批判あるいは反駁を試みているものであった。だが、そうした中で、1923年に生じた一つの事態は、両国関係においてそれまでにない特異な様相をみせたものであった。以下にはそれを挙げて、この問題と馬千里との関係について記しておくこととする。

1923年、この年も両国の関係は決してよいものではなかった。3月18日の「日記」には、彼がある国会議員のために、日本の「21か条取消し拒否」に対して（抗議の）電報を作成したことが記されているが、これは北京政府が3月10日に日本政府に対して「21か条条約の廃棄」を通告し、併せて旅順、大連の返還を要求したことに対して、日本が拒絶したことをふまえたものである。この後中国各都市では反日機運が高まり、旅大回収運動が盛んに行なわれた。また5月には全国各地で国恥記念日のデモや、対日経済断交を要求する運動がおこった<sup>28</sup>。そうしたなか、9月1日、日本に関東大震災がおこったのである。

日本に未曾有の大震災が起ったという情報は、9月3日には北京政府に伝えられ、翌4日には天津市民も知るところとなった。馬千里は4日の「日記」に「日本に地震、大火、津波がおこり、幾つかの小島が沈んだ模様。東京はすでに三分の二が焼け落ち、死者の数は50万とも伝えられる」と書き、「紅十字会の緊急董事会を召集した」と記している。そして翌日から紅十字会は救済活動にはいり、彼が校長をつとめる達仁女校でも日本に送る衣類を縫うこととなった。しかも日本救済活動が動き出したのは馬千里の周辺のみではなく、市全体も大きく動き出したのである。総商會が中心となった協済日災義賑会、省長が呼びかけ各界が参加した直隸日災救済会、警察庁長が各県を組織した天津急賑会、段祺瑞が名流に呼びかけた救済同志会などが次々に生まれ募金活動をはじめた。同様に民間にも広範な諸団体が結成され、日本への救済活動に取り組むこととなった。天津華洋義賑会、天津母国震災救済会、日本奇災救済会、全国芸界助賑会などそれである。そしてこの動向は天津のみならず、全国各都市、各地域にも及んだ。抗日気運の中で起こったこの急激な援助活動の高まりをどう捉えるか、これは従来も検討されてきたが、なお問題として残されている<sup>29</sup>。またこの問題がその後、米輸出解禁問題や中国人虐殺事件として外交問題化したことにも注意しておく必要がある<sup>30</sup>。ただ、馬千里のなかに直ちにおこった救済の感情と行動は、東アジアの両国の関係を考えるにあたって観照しておくべき出来事であると思われるのである。

次に第二の論題は、「国内政治」である。馬千里は時の政治に対して一貫して強い関心を示し、だが基本的には批判的であり、変革を求め続けていた。しかしその姿勢には、各時期の時代状況と、その時点で馬千里が社会的に如何なる位置にあったかによって必ずしも一様ではない複雑な様相をみせた。馬千里にとって強く認識された政治とは、北京政府の動きであり、その地位をめぐる争う軍閥間の抗争であり、中央の動向に連動して動く天津など地方の政治状況であった。それだけに彼は、従来から政治には関心があるものの、一貫して自らはそこに手を染めようとはしなかった。1921年1月に省議會議員或いは衆議院議員になるよう薦められたときも、時子周、孟震侯とともに取敢えてそれを断ったのである<sup>31</sup>。そして、自分の願いは「専ら公民の資格で「民意」を高めることにある」と述べたのであった<sup>32</sup>。従って同年8月、楽達仁の要請をうけて達仁女校の校長に就任したのも同じ考えによるものであったし、中国紅十字会、中国拒毒会、教育会、中国基督教会などの活動にそれぞれの中心として携わったのも同様の観点からであった。だがこうした馬千里の考え方は、「日記」からみる限り、22年から23年にかけて若干変化をみせるようになる。そこには1人の政治家温支英との出会いが関わっていた。

温支英（世霖）は天津の人で衆議院議員、清末から利権回収運動に取り組み、女学普通学堂をつくるなど、社会問題と女子教育への関心という点で馬千里と共通した心性をもっていた。そのため、1920年夏に天津で出会うと温は馬の人物と才能を評価し、特に22年に自らが政治団体「全民社」を結成すると、馬千里を北京に招き、彼の意見をききつつ日々様々な文書の作成や電文の起草を依頼するようになった。この招請に対して馬千里は『新民意報』編集長という職を辞し、だが論説は書くと約して北京へ向かった。このときは既に奉直戦争を経て直隸派が勝利をおさめ、年末、北京では黎元洪を大総統として張紹曾内閣が組閣される運びとなっていた。そして温支英はそこに閣僚としての位置を得たいと願っていたのである。そうした点につき年末年始の数日間にわたる馬千里の「日記」は興味深い。まず1922年12月29日の記述をみよう<sup>33</sup>。

帰り道に、私は温支英の家に行きそこで食事をした。彼によれば絶対「教育」（教育相）ではない、大方は「内務」そうでなければ「農商」だとのこと。もし決定したら私が秘書長になり、時子周には給与を出すから、華洋、新民意、党務など何でも担当してくれればよいという。夜10時に辞し全民社に泊まった。

そして、12月31日の「日記」は更に高揚し、大晦日にもかかわらず政治色極めて濃厚である。「温支英の家には皆が集まっていた。組閣閣僚のことで喧嘩諍々やったあと、張紹曾を電話に呼び出し、ひとしきり話し合った。組閣問題は、高凌霨が入閣できないという

ことで天津派が大反対している由。張の話では、閣僚名簿はすでに保定の曹錕にとどけられ審査中とのことであった。<sup>34</sup>

では、温支英は入閣できたのかといえば、1923年1月2日の「日記」にあるように、「張紹曾によると、閣僚名簿の指示を受けるため保定に派遣した朱泮藻が戻ってきたが、朱は曹錕に会えなかったため要領をえない。そこで張は再度根回しのため馮玉祥を保定に行かせた。全民社も谷、方、李、史4人を保定に派遣し、外交系の入閣が多すぎると反対しつつ、併せて温支英が内務担当相となるよう曹錕の支持を願い出た。また全民社の名で電報も送った<sup>35</sup>と努力したのだが、結果は入閣を実現できなかった。従って馬千里も閣僚の秘書長にはなれなかった。

では、馬千里は何故そうした政治の場における地位を得たいと願ったのだろうか。そのような馬千里が示す態度の変化をどう考えたらよいのだろうか——。何よりもその理由は、この段階における当時の人々の間では、馬千里ら進歩的知識人にとってさえ、なお直隸派に対して期待するところがあったということであろう<sup>36</sup>。この後1923年2月に、呉佩孚による「二・七惨案」がおこると、人々の期待は幻滅にかわり、代わって新たな勢力を求めるようになるのだが、この段階はまだ現実の政治状況への希望が維持されていたのだと考えられる。また第二の理由は、やはり体制の中に組み込まれている時に生ずる政治への期待が馬千里にもあったということではないだろうか。体制の変革を望むほど、そこに接近することには魅力があったということであろうか。

だがこの後、馬千里は父親の病気もあって次第に天津に戻ることが多くなり、夏までの間はなお温支英との関係を保ち、温の政治的立場の強化のために言説をもって援けているものの、彼に対しても次第に批判的な目を育てている。ある時などは温支英からの依頼で江蘇督軍への文章を起草しつつ、これは「はったり」ではないかと内省して「良心のとがめを感じ非常に苦痛だった」と記している<sup>37</sup>。また温の家に集う議員たちが、一方で国事を論じつつマージャンに興じる様子を皮肉な目で眺めている<sup>38</sup>。とくにこの年は政治世界の腐敗が明らかになった年でもあって、4月には全民社に関連する議員が39人も買収されていた。馬千里はこうした官場の腐敗を憤り、その日の日記にも、さらにはその後の日記にも張紹曾内閣への批判を記している<sup>39</sup>。また『新民意報』の評論欄にも「張紹曾的手段愈趨愈下」をはじめ「明搶大総統」<sup>40</sup>「争総統全凭膀臂粗」<sup>41</sup>などを書いて政治世界の問題点を批判している。この故か、夏がおわると馬千里は北京における政治の世界を脱して天津に戻り、温支英との関係もそれほどは終わった。そして秋10月、曹錕賄選に際しては当選祝賀電報を打つことにも断固として反対している。だがしかし、振り返ってみれば、1922年から23年にかけての上記のような馬千里の政治世界への傾倒は、『新民意報』にも、また馬千里個人にも、少なからぬ影響

を与えたものであった。新聞発刊については、馬千里は天津不在の間も論説は書き続けており、天津に帰ると必ず報館に足を運んだ。しかし彼の不在が与えた影響が大きかったことについては、以下の「日記」がそれをよく物語っている。即ち、「劉鉄菴から手紙があって、天津には不在でも、新民意報社には戻ってくるようにと言ってきた。その理由は、以前の名誉が損なわれる、『新民意報』が悪い影響を受ける、楽達仁に申し訳ない等ということであった。」<sup>42</sup>そのため、その後新民意報社の経営には曲折もあるのだが、1923年11月、関係者が集って相談した結果、馬千里が再び編集長となるのである<sup>43</sup>。しかしその経営を立て直すことは難事であった。

## 2. 副刊

『新民意報』の特徴のひとつは多くの「副刊」を擁したことであった。それは16種にも及び、その中には時代の趨勢にも大きな影響を与えた『星火』、『女星』、『覺郵』、『朝霞』などがあつた他、『詩壇』、『小説』、『脚雲』、『明日』、『向明』、『戯劇』、『青声』、『同光』、『豊台』、『導言』、『女権請願団特刊』、『女権運動同盟直隷支部特刊』など多種多様におよんだ。それらは、多くが馬千里と同年代或いはより若い青年を中心とした文学、演劇、学術に関わる団体や社会性を持つ組織による機関紙で、新しい文化の発信と自らの主張を掲げるためのものであった。しかも期せずしてほとんどが1923年に発刊され、この時期の文化形成、世論形成に役割を果たしたものであった。

先ず『星火』は、1923年1月1日発刊であり、それまで『新民意報』第4面に掲載されてきた「国民良友」が余りにこまごました記事をのせ、明確な主張もなかったところから、馬千里がこれでは「良友」ならぬ「損友」だとして取りやめ、代わって新たに設けたものである。従ってその「発刊のことは」は馬千里自身が「蛍光」というペンネームで書いた<sup>44</sup>。それによると、「点々とした小さな火が燎原に広がるか、一筋の火のままで終わるかは未だ不明だが、先ずはその原点から始め、社会改良を目標として前進する」としており、それが名称の由来である<sup>45</sup>。しかも彼の見方によると、現在その方法には2点あり、逐次進めようという社会改良派の方法と、私有財産制度の打破から着手するという社会主義派の方法とあるが、『星火』は前者の側に立つものであり、改良すべきテーマとしては、「家庭組織問題、婚姻問題、女権問題、遺産問題、学校教育問題、社会教育問題、納妾問題、娼妓問題、工場問題、労働時間問題、女工問題、童工問題、女子職業問題、乞食問題、貧民生計問題、教会問題」などが挙げられると、その主張を明確にしているのである。このように『星火』については馬千里が強く関与して始めたため、その初期には彼自身が「天健」或いは「光起」の名で幾つもの評論を書いている<sup>46</sup>。また全体の論題も時代性と社会性に富み、日本、ヨーロッパ、ソヴィエトなど異なる位相の海外動向にも関心を向け

ていることが看取できる。

『女星』は1923年4月に成立した女星社の定期刊行物である。初め週刊であったが、のち旬刊となり、副刊ではあつたものの「別途1000部印刷して全国の新聞社や団体や友人たちに送った」<sup>47</sup>とあり、発行部数は『新民意報』より多かった。女星社は、鄧穎超を委員長として天津で結成された組織で、24年1月には劉清揚を中心に更に『婦女日報』を発刊したほか、女性のための補習学校を設立するなど専ら女性のための活動を行っていた。その『女星』が創刊された経緯については、『新民意報』副刊担当の顧峻霄が、以下のような一読者の提案書簡に答える形で創設することを明言しているところから、当時の社会状況の一端を知ることができる。

「馬千里先生、顧峻霄先生（前略）現代中国社会の最重要問題は‘食’と‘性’の問題です。それは言い換えれば、労働問題と女性問題にほかなりません。貴報は労働問題に対してはよく注目し、貴報が提供している副刊『明日』などは労働問題偏重ですらあります。けれども女性問題については、『星火』が価値ある資料を提供しているとは思いますが、系統的で組織的な刊行物は無いにひとしい状況です。上海『民国日報』の『婦女評論』がそうであるように、毎週一回女性問題についての副刊を出してはいただけないでしょうか。如何お考えですか。唐山TF 1923.1.15」

「我々は早くからこのことを計画してきました。また一昨日、女権運動同盟会直隷支部の諸先生方とも話し合い賛意を得ました。準備の整い次第（副刊）開設する予定です。今後ご意見を頂きたく願っています。顧峻霄1923.1.21」<sup>48</sup>。

『女星』は、こうして創刊され、その後1924年末まで続いたのである。

もう一つ『覺郵』は五四運動に際して誕生した覚悟社の不定期刊行物である。覚悟社は中国共産党創設以前に共産主義思想に共感して結成された組織で周恩来や鄧穎超が中心であった。そして周恩来は1920年秋に勤工儉学のため渡仏したため、『覺郵』が創刊されるとヨーロッパから手紙を送ってそれがここに掲載された。1923年4月6日発行の第1号に載せられた「徳法問題と革命」は在欧の周恩来が鄧穎超に送った手紙の節録であるが、周恩来はそこで、当時のヨーロッパにおけるドイツとフランスの緊迫する関係に言及するとともに、ファシズムの台頭やコミンテルンの作用について見解を記しているのである<sup>49</sup>。馬千里は、前項からも明らかなように、自身は社会主義を必ずしもよしとはしなかったが、周恩来や鄧穎超とは親しい関係にあり<sup>50</sup>、副刊などの場で社会主義が論じられることは評価していた。こうした理解が、多様な副刊の存在を許容した要因であったと思われる。

以下その他の副刊については省略するが、このように1923年から24年にかけて『新民意報』は他を圧する多くの副刊を世に送り出した。それが同時期の天津社会において輿論形成や文化活動の広がりにより一定の意味

をもったであろうことは充分考えられる。更にここでは特に次の点を指摘しておきたい。すなわち副刊の多さは、そこに多様な人々が集っていたことを推察させるものであろう。彼らは、文化、哲学、歴史から新思想、女性問題、マルクス主義、新学術などにまでおよぶ幅広い関心をもつ人々の集団であった。その結果『新民意報』周辺はまさにそうした人々の集いの場になっていたと考えられる。馬千里の日記の記述からみても、夜間に校正を行なったあと新聞が出来上がるまでの幾らかの時間が彼らの語りあうときになっていたことが察せられる。天津にいる限り馬千里の生活のリズムは、昼まで寝ていて午後家を出る、多様な仕事をすませてから夕方新民意報社へ行く、そこで夜中過ぎまでの時間を費やすというものであり、おそらくその夜半の時間が多くの仲間との交流のときであったと思われる。そこでは当時の政治、経済、思想、宗教、そして中国の前途について語られたのであって、それが当時の進歩的な青年を育てる場となったであろうことは想像に難くない。また、その経営について一点付け加えれば、新民意報社は、報道の域にとどまらず、途中その業務を拡大し、先述したように劇団を後援したほか、書店、文具などにまで活動の場をひろげた。例えば、子会社ともいべき新教育書社を立ち上げ、科学分野の子供向けの読み物を刊行したほか、小学生に向けた文学や歴史の小叢書や連環画を出し、文具と併せてそれらを天津の学校に頒布したなどがそれである<sup>51</sup>。それらの事業は結果として赤字となり、成功したとは言いがたいものであったが<sup>52</sup>、係わった青年たちを育て、多様な交流を促進したといえることはできよう。

### Ⅲ. 『新民意報』の停刊と馬千里

#### 1. 1924年

1924年は、大きく言えば、年初に中国国民党による第1回全国代表大会の開催を基盤にして、国共合作に基づく新たな勢力が誕生し、これが北京政府をめぐる諸勢力の中に従来とは異なる構図をもたらしていった時であった。いわゆる国民革命期のはじまりである。その結果、秋には曹錕など直隸派による横暴にたいして、奉天派、安徽派そしてこの国民党が三角反直同盟をくみ、直隸派との間で第二次奉直戦争を戦ったのであった。しかも10月23日になると、それまで直隸派と関連を保っていた馮玉祥が内部からクーデターを行ない、曹錕に停戦と下野を求めて北京を占領した。馮玉祥は南北統一を目指して孫文に北上をもとめ、孫文もこれに応じて「北上宣言」を發し国民会議の開催をめざして北上の準備にはいった。孫文は、この機会に国民党の目ざすところを広く国民に伝え、より多くの人々を結集して党の勢力基盤を固めることが重要であると考えたのであろう。その対象は実業団体、商会、教育会、大学、各省学生聯合会、労働組合、農民組合、反直隸派各軍、各政党代表など広範な各層であるとき

れ、そうした力を結集するため国民会議の召集が求められたのであった。

さて、この大状況は馬千里の周辺にも確実に影響を与えていた。以下は、馮玉祥のクーデターにはじまる1週間の「日記」の一部を抜粋したものである。

- ・10月23日：本日午後、京津電報、電話、軍用電話、汽車がすべて不通となった。デマとうわさが広がり租界へ向けて居を移すものが多くみられた。心配と惧れで学校に留まることなどできなかった。
- ・10月24日：馮玉祥が兵を率いて熱河から北京に入り総統府を囲み曹錕に下野を迫ったと知った。戦鬪があり、すでに呉佩孚は職を解かれた由。早朝学校へ行き、朝礼で学生たちに怖がらないよう伝えた。
- ・10月29日：夜10時、新民意報社が封鎖された。鎮守使衙門の兵が来て階上階下の者18人を印刷工に至るまでみな捕らえていった。理由は『新民意報』が代行印刷をしている『民新報』がだした呉佩孚についての号外が軍心を乱したからということで、奉天派に通じているというわけだが、我々は奉天派、直隸派、安徽派など、どれにも賛同していない。軍閥は民国に害をなすものだ。民治の国家は軍閥が関わる政権であってはならない。

このあと天津の街は各勢力の錯綜するところとなり、そのなかで11月7日、奉天軍が入城してきた。そしてここから馬千里および『新民意報』周辺には時の政治変動と共振するかたちで一連の相次ぐ事態が起こっている。それは1925年1月初の「停刊」にいたる『新民意報』最後の姿でもあった。

そもそも当時、『新民意報』は既に継続が難しい段階に至っていた。第一の理由は明らかに資金の逼迫である。借款、拠出、寄付などの状況からみて経営は既に回復可能な域を越えていた。第二は人的な理由である。馬千里以下特に熱心であった創業者4名が、夫々に他に忙しい仕事を持ち、編集業務に専任できたものは既に劉鉄菴がひとりのみとなっていたからである。馬千里も、編集長として論説を書き可能な限り入社してはいたものの、達仁女学校校長の職に加えて、23年10月からは葉王廟小学校の校長にもなり、1日に2校を掛け持ちする有様であった。加えて崇徳女子学校、国民生計学校の各董事、直隸省及び天津県第一区の教育委員、その他幾つかの団体の責任者を兼ね、その多忙さと多忙さからくる疲れは覆うべくもなかった。したがって彼らはこの状態から脱却をはかる最もよい方法を模索していたのである。

#### 2. 孫文の北上と『新民意報』の停刊

1924年末、北上した孫文が天津に入った。当時、馬千里はまさしく孫文の北上に期待をかけていた。11月後半の「日記」からは彼が専ら孫文に希望をかけている様子をうかがうことができる<sup>53</sup>。それは、天津で

人々が日々経験している困難な状況の根源ともいえるべき軍閥勢力と対抗するためには、孫文を中心にして、より多くの人々が党派をこえて共同することが必要だと考えていたからであろう。だが孫文は天津に入ると同時に病を得て、張園で休息をとる日々が続いた。そしてこの間に政治のうねりとともに馬千里ら新民意報社にも大きな提案がもたらされたのである。以下に、「日記」から特にその部分を取りだして見ておくこととしよう。それは1924年暮れの僅か5日間の出来事であった。

- ・12月27日：午後4時新民意報社へいくと、譚小岑が来て『新民意報』を国民党に売却する案について語った。劉鉄菴と相談する旨約した。
- ・12月28日：譚小岑とともに新民意報社へ行き劉鉄菴も交えて張園へ赴き、汪精衛、黄昌谷と『新民意報』の件について話し合った。
- ・12月29日：午後新民意報社へいき、そこで譚小岑と黄昌谷がさらに相談した結果として“『新民意報』を引継ぐが、紙名は『民意報』と改名する”案を得たことをきいた。私が公司章程を起草し、劉鉄菴が契約書をかき、それぞれに契約した。
- ・12月31日：大雪の厳しい寒さの中、駅頭で北京へ向かう孫文一行を見送った。その際黄昌谷と『新民意報』接収の件について話した。

このスピーディな『新民意報』売却の経緯については、実際の折衝にあたった譚小岑が後に「孫中山先生北上与『新民意報』」<sup>54</sup>を記し、この件について詳細な説明を加えている。その結果、「日記」によっては読み取り得なかった12月31日に馬千里が黄昌谷と語り合った内容が、『新民意報』の「引継ぎ」に関するのではなく、実はその件の「解消」についてであったことがわかる。そこでこの件については、上記5日間の経緯をもう一度見直しておかなければならない。

譚小岑は湖南省の人であるが、北洋大学出身で在学中から五四運動に参加したため、卒業後も天津で覚悟社に加わり、鄧穎超とともに女星社を設立して『女星』旬刊を創設した。そして、既述のように、この『女星』は『新民意報』の副刊として刊行されたため、譚は馬千里とも旧知の間柄だったのである。また1924年には明星通訊社を起して英文版の『華北明星報』や日本語版の『毎日新聞』から軍閥批判のニュースを集めて翻訳提供し、租界の報道各社から歓迎されるなど報刊事業に通じていた。従ってそうした活動の中で、孫科など孫文周辺の人々とも知り合っていたのである。譚の回顧によれば、当時孫文は天津在住が長期になることを予想して、天津で新聞を一つ発行したいと考えていた。そこで譚小岑は、12月20日、いま困難の極にある『新民意報』を引き継ぐことを黄昌谷に建議し、馬千里や時子周を彼らに紹介したのである。そして一週間後の12月27日、黄がこの提案を受け入れ、新民意報社を訪ねてその様子を見、印刷工場がやや手狭ではある

もののこれは修理拡充すればよいとして、正式決定のため『新民意報』側責任者が張園にきて汪精衛と面談するよう要請した。「29日」<sup>55</sup>、馬千里、時子周、劉鉄菴と汪精衛、黄昌谷が集まった上で、現在の『新民意報』を『民意報』と改め国民党側が引き継ぐこと、その総括および編集長には黄昌谷が就任すること、だが編集部員、印刷工員などはこれまでの人たちを引き継ぐこと、先ず資金として5000元を支出すること等を定めたのである。馬千里ら4人は張園を辞すとき、『新民意報』が新たな生命を得たことに対し喜びで一杯だったと譚小岑は記している。

だが、12月31日早朝、黄昌谷が慌しくやってきて、孫文が本日午前9時すぎに北京へ向かうこと、『新民意報』の件はやむなく取りやめとすることを告げていった。そのため譚小岑は直ちに汪精衛にあてて書信を書き、それを汪に駅頭で渡した。その内容は、天津が華北商業の中心であり重要な地点であること、『新民意報』の関係者は国民党と考えを共にする進歩人士であることなどをあげ、毎月一定の経費を渡してこれを天津における国民党の機関紙としてはどうかと提案したものであった。だが汪精衛からは何の意思表示もなかった。ただ黄昌谷から1月6日に馬千里に宛てて、本件を取りやめる旨の電報が届いたのである。こうして『新民意報』引継ぎの件は完全に終焉した。

馬千里の「日記」には1月7日に彼が停刊に同意したことが記されている。そしてその後の日記には『新民意報』の名が記されることは二度とないのである。

今回「馬千里日記考(2)」として『新民意報』の創刊とその後の刊行の経緯について取り上げたのは、この問題が1920年代前半の一つの時代を象徴していると考えられる故である。なぜなら、既に述べたように、この時期を国民革命に向かう「過渡期」とするならば、この間社会の底流では人々の意識にも変化が見られたはずであり、それを推進した諸活動が展開されたはずであり、そして新聞発刊という言論活動こそ、まさしくその重要な基礎的構成要件であったといえるからである。馬千里とその仲間たちが先ず報館の設立にむかったことは、こうした時代の要請に応えようとした積極性であったといえるだろう。再度振り返ってみれば、1920年夏、逮捕による拘束を解かれた馬千里らは、それが既定路線でもあるかのように新聞を創刊した。その速さからみて、この件は拘禁中にすでに決意していたことであつたと思われる。即ち、馬千里等は1月に逮捕されたが、4月に地方検察庁に送られて新聞を読むことができるようになると、最初は差し入れてもらった新聞を回して読み、その後は購読幹事を決めて定期購入し、全員でニュースの整理、報告をおこなうなど新聞を通して社会の動向を知ることにつとめた<sup>56</sup>。おそらくこの間に新聞のもつ重要性をひときわ実感したのであろうと思われる。特に馬千里は、逮捕直後から新聞そのものに並々ならぬ関心もち、『益世報』『泰晤士報』『北京晨报』『天津啓明日報』な

どの紙面構成を「日記」に詳細を記しているほか<sup>57</sup>、報館開設の経費を、人件費から家賃、電報代、ロイター電経費に至るまで計算し、それが1か月450元であると記していた<sup>58</sup>。それは共に在った漢文版『泰晤士報』經理の孟震侯から得た情報ではなかったかと思われる。こうした経緯から、釈放された暁には報館の設立を行なうということが馬千里にとって既定方針となっていたと考えられる。

そして本稿は、以下専ら馬千里らがどのように『新民意報』を創刊したか、そこで彼らは何を表明したか、副刊の盛行をどう考えたらよいか、その間の政治社会状況とはどのように関わったのか、刊行継続には如何なる困難が伴ったか、そして何故停刊に至ったのか、などを明らかにした。従ってここではもう繰り返さない。ただ一点、かつて五四時期に「救国」を掲げて共に活動し、共に逮捕拘束されたその他の仲間たちがこの期間に何をしたかについて若干付け加えておくこととしたい。それはこの時期のもつ特質のもう一つの表明となるであろう。

1921年1月24日の「日記」には、この日多くの仲間が会賓楼に集い逮捕1周年記念の宴をもったと記されている。宴の参加者は21名、うち前年の逮捕者は馬千里以下10名、他は宋則久ら理解者、応援団たちであった。逮捕された仲間ここでここに参加しなかったものの主たる共通点は、彼らの中の5名——周恩来、郭隆真、張若名、于方舟、馬駿がこの後創立される中国共産党に入党したということである。そしてこの時不参加であった理由は、周恩来、郭隆真、張若名3名は前年秋に勤工儉学のため渡仏したからであり、于方舟は李大釗の指導下で天津マルクス主義研究会に加入し組織化に忙しかったからであり、馬駿は東北に戻りその後ソ連に赴いて不在であったからであった。つまり彼らは釈放後直ちに自らの方向を見定めその活動に入っていたのである。そして彼らのその後を辿れば、于方舟、馬駿、郭隆真の3名は黨員としてはなばなく活動するものの、それぞれ27年、28年、31年に捕らえられて処刑された。他方、宴に参加した10名中、馬千里、時子周、孟震侯、夏琴西については本稿で既に明らかにしたとおり、この期間をとおして『新民意報』の刊行につとめてきた。そして馬千里と時子周はこの後も教育活動や各種活動を継続しつつやがて中国国民党に入党する。夏琴西は変わることなく実業界の法律顧問をつとめ、李散人は同じく広告業を続けた。その他李培良はこの後共産党に入党したが31年病没し、孟震侯は次第にアヘンにおぼれ28年に病に倒れた。

以上のように見ていくと、五四時期に共に国民大会の運動に参加し、共に逮捕された人々の中にも、20年代前半のまさにこの時期に様々な分化が生じていることが明らかとなる。この時期に、目指す方向の違いや、手法の違い、行動様式の差が露わになってくるのである。みな改革を模索するのだが、流動極まりない政治情勢の中で、迷い、迫られ、主体的にあるいはやむなく多様な選択を行なっている。そこでは大きな潮流と

して、孫文と国民党の側に傾斜していくもの、共産党に入党してその活動を開始するもの、また実業その他の世界にはいり社会運動から離れていくもの等の分化が明らかになる。そしてこの時の選択が、彼らの生涯にとっては決定的な影響を与えるものとなった。本稿が取り上げたこの時期は、彼ら若い知識人たちにとって、そうした模索と分化のときでもあったと考えることができる。

## 注

- 1) 拙稿「馬千里日記考(1)」『放送大学研究年報』24号2007、45～55頁。
- 2) 当時の時代状況については多くの研究があるが、本稿に関連するものとして特に2点をあげる。坂野良吉『中国国民革命政治過程の研究』校倉書房、2004。山田辰雄『中国国民党左派の研究』慶応通信、1980。「過渡期」という考え方については前者より教示を受けた。
- 3) 「馬千里日記」(以下「日記」と略記する。その大要については前稿を参照。)1920年8月2日。
- 4) 劉嘉俊「回憶『新民意報』」『天津文史資料選輯』(以下『文史資料』と略記する。)第33輯 天津人民出版社、1985、36頁。
- 5) 「日記」1920年8月17日。
- 6) 「日記」1920年8月20日、同8月24日。
- 7) 「日記」1920年9月3日。
- 8) 「日記」1920年9月15日。
- 9) 「日記」1920年9月16日。
- 10) 「各界聯合会開會紀」『大公報』中華民國9年9月16日、同18日。
- 11) 『大公報』中華民國9年9月18日の他の記事「道尹派員督捕蝗虫」「派員視察災區」「禁止隣省難民入省」「四県呈請購糧平糶」などによれば、天津政府は人員を派遣して蝗虫を捕らえるよう訓令しているし、災害区の兵災を含む災害の実態を調査させている。とくに山東からの難民流入を禁止している。また、米、麦、粟、いも、雜糧の購入と放出を行なっており、難民の増加が深刻な問題であることを示している。
- 12) 「紅会開董事會議」『大公報』中華民國9年9月16日。但し、15日の「日記」にはこの件は記されていない。
- 13) 「日記」1921年2月3日。
- 14) 「日記」1921年2月22日。
- 15) 「日記」1921年6月10日。なお当時の新聞部数については、天津第一とされる『益世報』が5000部であったとされる。周拂塵「我和『華北新聞』」『文史資料』第33輯 55～80頁。
- 16) 「日記」1921年4月21日。
- 17) 「日記」1921年9月15日。尚この日及びその後の演劇活動については、前掲劉嘉俊回憶文に詳しい。
- 18) 「一念差」については注19参照。「闊人的孝道」は蒲殿俊が創作した話劇で富裕層に見られた孝道を取り上げ封建的な伝統文化のもつ欺瞞性を明らかにしたものだという。崔国良『南開話劇運動史1909～1949』南開大学出版社。
- 19) 話劇「一念差」は旧社会(清朝)の官僚の腐敗を描いたもの。主人公葉中誠は友人の讒訴をきき李正齋を獄に落とす。その後良心の呵責から李を救おうとするが李は既に獄死していた。葉は自己の財産を李の妻子に

- 提供しようとするが拒絶される。葉は自己の罪を知り、讒訴した友人を殺し自らも自決するという内容。勸善懲悪の要素がみられる。またその作風にはトルストイの影響があるとされる。同上。
- 20) 蒲殿俊は清末及び民国期の政治家。辛亥革命に先立って行なわれた四川の立憲運動、保路運動の指導者。民国成立後衆議院議員、一時進歩党で活動。1919年『農報』編集長。演劇を重視し、演劇雑誌を創刊した。
- 21) 尚、論説ではないが、前稿に述べた周恩来による「警庁拘留記」と「検庁日録」が1920年2月から21年前半にかけて『新民意報』に掲載され、さらにまとめられて同社から刊行されたことは重要であった。前稿参照。
- 22) 「日記」1920年9月18日。
- 23) 「日記」1924年1月21日。
- 24) 「日記」1924年4月25日。これは、この日の『新民意報』に、1人の日本人の演説が載せられていて、その主張が、中国人の「排日」は親米派の主張なのだであったことに反駁したものである。
- 25) 「日記」1924年3月4日。これは魯嗣香が『新民意報』に親日的な主張を書いたことに対して「発言しないわけにはいかない」として反駁したものである。
- 26) 「日記」1924年3月6日。これも魯嗣香に反駁するもので、馬千里はそこに「風刺をこめた」と記している。
- 27) 「日記」1924年3月9日。これは魯嗣香のみならず、李伯勳、楊桂民（楊以德の子）らが長江方面に遊説にいき、中日親善を説いていることに対して記したものである。この表題は人間誰しも三句話せば自分の得意なことについて話すことになるという意味。
- 28) しかし、反日運動が高潮をむかえるなか、その底流では両国関係者の間で問題解決のための会合がたびたび開かれていた。これは両国にそれぞれに理由があり、日本政府は日貨排斥運動の取締に加え居留民の保護が必要であったからであり、北京政府の曹錕らは秋の大統領選挙をひかえて日本の応諾をとりつけるためにも、運動の鎮静化が必要と判断したからであった。そのため天津では、一方は楊以德警察庁長、他方は排日幹部、商会代表と日本代表がでて数回会合がもたれたという。しかもそれが奏功して、8月は運動がやや沈静化していた。そして9月1日には、丁度日本側の主催で第2次中日懇親会がひらかれ500人余が参加していたのである。「馬千里日記」の9月1日には次の記述がある。「昼時、私は道で孟震侯に会い立ち話をした。孟が私に午後の中日懇親会に行くのかと尋ねた。日貨ボイコット取消しのためであるという。私は行く気はない。夜、新民意報社へ行き論説を書いた。「中日親善の疑問」である。」
- 29) こうした関東大震災と中国の対応については、筆者もかつて考察したことがあり、その成果を天津地域史研究会大会において発表した。貴志俊彦「1994年度天津地域史研究会学術活動の記録」『近きに在りて』第27号、1995、95～97頁。資料としては外務省外交史料館記録『支那排日関係雑件』第3巻参照。この問題はなお検討の必要があると思われる。
- 30) この点については、川島真「関東大震災と中国外交」『中国近代外交の形成』名古屋大学出版会、2004、518～536頁参照。
- 31) 「日記」1921年1月13日。
- 32) 同上。
- 33) 「日記」1922年12月29日。
- 34) 「日記」1922年12月31日。
- 35) 「日記」1923年1月2日。
- 36) この頃の時代背景については、前掲堀野著。栃木利夫、堀野良吉『中国国民革命』法政大学出版局、1997など参照。
- 37) 「日記」1923年5月30日。
- 38) 「日記」1923年3月11日。
- 39) 「日記」1923年4月23日、28日。
- 40) 「日記」1923年6月11日。
- 41) 「日記」1923年6月13日。
- 42) 「日記」1923年3月9日。
- 43) 「日記」1923年11月8日。
- 44) 「日記」1922年12月30日。副刊については、劉嘉駿「良師益友一馬千里先生」中国人民政治協商会議天津市文史資料研究委員会『二十世紀初天津愛国教育家馬千里先生』1985、61～64頁。前掲劉嘉駿回憶文参照。
- 45) 「新民意報副刊発刊詞」『五四時期期刊紹介』3-下、人民出版社、1979、458頁。
- 46) 「新民意報副刊（一）星火」同上 562、563頁。その論説名は「什么話」「公理戰勝了嗎」「旧家庭的分析」「社会主義的派別与其批評」「我的到農村去的意見」「世界和平」「五一史」「一八八六年五月一日芝加角被害八烈士伝」などである。
- 47) 譚小岑「關於『女星』旬刊和『婦女日報』」『天津女星社』中共党史資料出版社、1985、486頁。
- 48) 「増刊婦女的定期刊行物的提議」前掲『天津女星社』23頁。
- 49) 「徳法問題と革命」『周恩来早期文集』下巻、中央文献出版社・南開大学出版社、1998、506、507頁。
- 50) 馬千里と周恩来との関係については前稿を参照。鄧穎超との関係は、馬が達仁女校の校長であったとき、教え子でもあった鄧穎超にその教師となることを要請したことから親しさをました。本稿の資料の一つでもある『廿世紀初天津愛国教育家馬千里先生』には、鄧穎超がその巻頭言として「緬懷師友馬千里先生」を書いている。
- 51) 前掲劉嘉駿論文 46頁。
- 52) 「日記」1923年7月7日。新教育書社には600円の負債があったとある。
- 53) 「日記」1924年11月18日、22日、23日、26日、29日など参照。
- 54) 譚小岑「孫中山先生北上与『新民意報』」『文史資料』第33輯 51～54頁。
- 55) 譚小岑はこの日を30日としているが、これはのちの記録であるため記憶違いもありえる故、当日書かれた馬千里による「日記」の日付を採用した。
- 56) 「日記」1920年4月13日、26日。
- 57) 「日記」1920年2月15日。
- 58) 「日記」1920年3月17日。

(平成19年11月2日受理)